生物研究

第 XIV 巻　第 3·4 号

1970

THE LIFE STUDY

Vol. XIV, Nos. 3.4

October 31, 1970

FUKUI; JAPAN

次に，*Passaloecus*, *Stigmus*, *Spilomena* についての検索表をなるべく早く出したいと思っておりますが，これらのうち *Spilomena* について，これまでコシブトエンモンバチとエナシエンモンバチを混用しました。今後は**エナシエンモンバチ**（種名をつけるときは――エナシエンモン）に整理したいと思います。

次にタイセツギングチの学名ですが，これまで種小名に *varus* が使われてきましたが，これをひと昔前の *varius* にもどすことになりました。そのわけは次のようです。

Lepeletier et Brullé が初めて発表したとき，たしかに *varus* となっていたのですが，これは明らかに *varius* の誤りなので，Lepeletier 自身後にこれを *varius* と改めて使用しています。Kohl も1915年のモノグラフで，その点を指摘して *varius* を採用しました。しかし，これより先に W. A. Schulz が *Crabro varus* Lepeletier et Brullé は *Crabro varus* Panzer（正体不明の種）に先取されているとして，次先種名の *C. pusillus* Lep. et Br. を使用すべきだと述べています。Kohl はこれに反論して真実は *varius* だからこれで支障なしとして *varius* を用いたのでした。ところが1935年に O. W. Richards は原名の *varus* を再び使用し，Leclercq も1954年のその大著で *varus* を採用しました。多分これらの人たちは命名規約を忠実に守って，誤りであっても，その原名に従ったのであろうと思われます。それで私も一応これらの人たちに従ったわけですが，厳密に言えば *varus* を使うつもりなら Schulz の述べているように，*pusillus* を使わなくてはならないことになります。それでこのころは Beaumont なども *varus* を使わず，*varius* を用いています。*varus* は *varius* の誤植であると見れば現行規約にあてはめても，*varius* を使用してよいわけです。以上のような理由でタイセツギングチの学名を今後，Kohl 時代のものにもどして *Crossocerus*（*Crossocerus*）*varius* Lepeletier et Brullé, 1834と改めることにしました。（常木勝次）

オオジガバチモドキの造繭法について

私が以前キスケとオオの両種のジガバチモドキの造繭法を調べたとき，それは本誌11巻に南部さんが書いているのと全く同様であった（Etizenia, 45: 15, 1970）。ところが今夏観たオオジガバチモドキでは繭の造り方がたいへん違っていた。この種が事情によって，造繭法を変えるものかどうか，将来確めるための一助として，それについて書いておくことにする。

径12，長さ 60 mm の管びんの奥に極小量の水を吸わせた脱脂綿を少し詰め，その上に粘土を厚さ 3 mm の凹形に固くおしつけた。ここに成熟幼虫 1 頭を入れ，入口に綿栓を施した。8 月 4 日の夕刻であった。

8 月 5 日 7 時40分学校についてすぐ見ると，幼虫は粘土壁に接して繭を造っていた。繭は後部半分がうすく形をとっていた。ぼんやりしているが，そこに漏斗ができているように見えた。8 時30分，幼虫は頭を外方の開口部から出し，繭をびんの入口に向けて造り足していた。繭はうすくて，中の様子がよく見えた。11時，繭は外方が閉じられており，幼虫は中で糸をかけ足している。12時，幼虫は反転して内方に糸をかけている。繭を支えている釣糸の中半分は内方に斜めに向い，外半分は外方に斜めに向っていた。16時40分，繭はずっと厚くなり，黄灰色がかっていて，中でなお働いている幼虫が，わずかに透視できる。

この幼虫は幼虫室の外壁に接して繭を造らず，広い部屋の内壁に尾端を接して繭を造った。そして，最初外方に向って漏斗を作らず，内方に向って漏斗を作り，それにのって，まず繭の内半分を造った，それから斜め外方に糸を張りながら，繭をびんの入口の方へ延して行き，十分の長さになると，そのままそこを閉し，後は繭を内部から補強する仕事に従った。

このやり方は前に見たのとひどく違うが，これは幼虫が内壁に接して繭を造るとき，いつもやる方法なのであろうか。

観察中，私はこの種は，その習性を初めて見る種類であろうと思っていた。それで，同月17日に羽化した成虫を調べて，それが *malaisei* であることを知って，大いに驚いた次第である。（常木）